

前回は、ユダヤの人びとを教え導く立場の祭司とレビ人が、追いはぎにあつて息も絶え絶えな旅人をそのままにして立ち去った … という話でした。今回はこの旅人を見たサマリア人は何をしたかをみていきましょう。そして、なぜそれが可能だったのかを考えてみます。

### ◇善きサマリア人のたとえ (その2)

3番目に傷ついた旅人を見たのは、〈サマリア人〉でした。この人は、旅人の『そばに』来て、『その人を見』て『憐れに思い』、『近寄って』傷の手当てをし、自分のロバで宿屋に連れて行きました。そして、自分は旅を続けなければならないので、宿屋の主人に金を渡し、介抱を頼んだのです。

「ああ、このサマリア人というのは、エエひとやなあ。見上げたモンや」 … で『聖書』を閉じてしまうと、このたとえ話をわたしたちに残してくれたイエスに申しわけないこととなります。

傷ついた旅人と祭司・レビ人は〈ユダヤ人〉であり、サマリア人とは〈犬猿の仲〉だったのです。その理由を書きはじめると、今回はそれだけで終わってしまいますので、簡単に説明します。

紀元前6世紀(598年)に新バビロニア王国が、南北に分かれていたイスラエル王国のうち、南のユダ王国に侵入しました。エルサレムの神殿を破壊したり、住民を捕らえて首都・バビロンの近くに連行しました。これを『バビロン捕囚』と呼びます。人びとの間には、自分たちの聖地の崩壊と捕囚という思いもよらぬ出来事にあい、「神は我々を守り、導いてくださる」という信仰への疑いが起こりました。しかし、エゼキエルや第2イザヤなどの預言者が現れて、再び神の支配が到来する希望を語り、信仰を守りとおすために力を尽くしました。それによりユダヤ独自の文化が芽生え、「ユダヤ人」という民族的概念が生まれたのも、この時代からと言われます。

その後、アケメネス朝ペルシャに新バビロニア王国が滅ぼされ、捕囚された人びとは紀元前538年、開放されてエルサレムに戻り、神殿再建に取り組みます。サマリア人は神殿再建に協力を申し出ますが、祭司は〈ヤハウエ(古代イスラエルの神の名)信仰〉の**純粋性**を守りたいため、これを拒否します。というのは、サマリア人は紀元前721年頃から、イスラエル王国周辺の各地から移住してきた〈異邦人〉で、サマリア地方にいたイスラエル人との雑婚により生まれた人々とされていたのです。つまりユダヤ人にとっては〈よそ者〉なのです。

また、サマリア人は《モーセ五書》(旧約聖書の『創世記』『出エジプト記』『レビ記』『民数記』『申命記』)だけをユダヤ教の「正典」(教団・教会により公に認められ、信仰・教義・生活に規範を与える書物)とした … など、『聖書』の内容解釈にユダヤ人とは少し違った視点をもっていました。それにより、ユダヤ人とサマリア人の間に憎悪の念が生まれたのです。

傷ついた旅人はユダヤ人ですから、サマリア人は「おかわいそうに、だれかに助けてもらいな」と、見知らぬふりをして立ち去っても当然な関係でした。しかし、同じユダヤ人である祭司とレビ人が何もせず、〈敵対関係〉にあるサマリア人が助けたのです。

『上智大学 夏期神学講習会』でお話を伺うことが多い宮本久雄師（神学部教授）は、差別扱いされていたサマリア人が、いわば〈敵〉であるユダヤ人を介抱したということは、『無条件・無限な愛敵の行為』であり、彼はイエスの言う『小さな幼児のような者、父（神）とイエスを知っている者』であり、サマリア人の介抱を受け入れたユダヤ人も、『ユダヤ教の（民族的・文化的・政治的・歴史的な閉ざされた）自同性（自己同一性）を〈外〉に棄てられた、ただの赤裸な無条件の人間になった』と書いておられます。

わたしたちは、何かしらの社会集団に属しながら人生を過ごします。いちばん小さい単位の〈家族〉から始まって、学校・職場などの集団を経験しながら、地域や国という集団にも属していることを意識していきます。それぞれの〈集団〉には独自のルール・歴史・文化・伝統などがあります。その中で生きていくには、集団の決まりごとを守り、協調していく必要があります。

しかし、その集団のルールや考え方を必要以上に絶対視すると、ほかの集団のあり方をみとめない〈排他主義〉に陥る危険があります。「自分（たち）は正しい」「わたしたちが主張することこそ真理であり、正義だ」— この〈エゴイズム〉が、人間の歴史を紛争や戦争の絶えないものにし、さらに人間性まで蝕んでいることは周知のとおりです。

古代における〈宗教〉の人びとに対する影響力は、わたしたちが想像する以上のものがあつたはずです。現代でもさまざまな宗教間の対立が、中東周辺の国々をはじめとする世界各地で火花を散らしています。彼らには、お正月は神社で初詣を、お盆にはお寺へ墓参りを、さらにクリスマスまで祝う … という、様々な宗教儀礼の中で生活する日本人には考えられないような信仰に対するひたむきさと執拗さが見られます。

サマリア人は「敵を助けたら、仲間に何と言われるだろう …。裏切り者にされるだろうか」、旅人は後日、「サマリア人に助けられたことを仲間が知ったら、何と情けなく恥知らずな男だと言われるかもしれない」という気持ちを抱いたはずです。自分だけではなく、家族や親戚までもが仲間はずれになることを覚悟しなければならない状況での選択だったのでした。

宮本師は、傷ついたユダヤ人の旅人と助けたサマリア人はそれぞれの宗教的集団の中で身にこびりついた**不要な〈自己同一性〉**（アイデンティティ＝自分を取りまく環境や時間の流れにかかわらず、変わらない主体性、いつも自分が自分のままであること）を棄てた、あるいはその固い〈殻〉を破ったからこそ、〈敵〉である人を助け、〈敵〉に助けられた — と記しています。傷ついた人を見れば、〈憐れに（かわいそうに）に思い〉、〈近寄〉ることができる〈**幼児**〉のような、〈何の偏見・差別もない、ただの一人の人間〉になれたからこそ、助け・助けられる人間になれた — というわけです。

今回は、「わたしの隣人とはだれか」という律法学者の問いに対し、イエスが『善きサマリア人のたとえ』を持ち出したのは、『隣人』についての定義をまったく逆転するため

だった … ということを書きたいと思います。

【引用または参考にした書籍】 ・宮本久雄『「善きサマリア人」の譬えの地平 ―今日にどんな  
出会いの地平を披きうるのか』（宮本久雄、武田なほみ『危機と霊性 Spirituality beyond Crisis』  
（日本キリスト教団出版局、2011） ・松村 明 監修 『大辞泉 第二版』〔上・下〕（小学館、2012）  
・日本聖書協会『聖書 新共同訳 旧約聖書統編つき 引照つき』